

手紙

2008(平成20)年3月1日鑑賞〈ホクテンザ1〉

★★★★★



監督＝イ・ジョングク／出演＝パク・シニャン／チェ・ジンシル／チェ・ヨンミン／イ・ジュンソプ／ソン・グァンス／ナム・サンミ（エスピーオー配給／1997年韓国映画／93分）

……1997年の韓国ナンバーワンヒット作は、「これぞ韓流！」という涙いっぱいのラブストーリー。「メロドラマの貴公子」パク・シニャンも、当時の好感度 No. 1の美人女優チェ・ジンシルも最高！ それにしても、韓流ラブストーリーは手が込んでおり（？）、クライマックスまではひと山もふた山もあるから、単純に一喜一憂しないように……。

1998年度のナンバーワンヒット作を今

「韓流」が日本で大ヒットしたのは、何とんでも2003年に日本のテレビで放映されたヨン様ことペ・ヨンジュン主演のテレビドラマ『冬のソナタ』からだが、1998年度の韓国映画ナンバーワンヒット作を11年経った今はじめて観ることに。

もっともナンバーワンヒットと言っても、1998年度当時の観客動員数は170万人とのことだから、歴代トップワンである『グエムル 漢江の怪物』（06年）の1298万人、2位である『王の男』（05年）の1230万人などに比べれば、少ないもの……。

美人女優はあの……

私はチェ・ジンシルという美人女優を2月23日に観た『誰が俺を狂わせるか』（95年）ではじめて観てすぐに大好きになったが、94年の『女房殺し』で大鐘賞主演女優賞を受賞した彼女は、1995～97年頃は韓国一の人気女優だったとのこと。

そこで彼女の経歴をネットで調べてみると、ビックリする事実が判明。すなわち、トップ女優となった彼女は、2000年に5歳年下の野球選手と結婚し、話題を呼んだが、わずか3年9カ月で離婚するに至ったとのこと。ビックリしたのは、その結婚相

手が読売巨人軍にいたサウスポーのピッチャー、チョ・ソンミン（趙成珉）だったということ。『誰が俺を狂わせるか』や『手紙』で観るチェ・ジンシルの美しさは、チョ・ソンミンとの結婚生活が破綻した後、二度と見られなくなったらしいが、それでも彼女はその後果敢に「妖精チェ・ジンシルからオバタリアンになって帰ってきた」とのことだから、エライ！

こんな出会いは映画の中だけ……？

映画にはよく駅が使われるが、この映画の冒頭は京江駅で、2人がすれ違いざまにぶつかることからスタートする。ジョンイン（チェ・ジンシル）は駅でもらった鉢植えの花を大切にもっていたため（？）、切符と財布を落としたまま列車に飛び乗ってしまったから大変。もっとも、それに気づいたファニユ（パク・シニャン）が直ちにタクシーを飛ばして列車を追っかけたから、切符と財布は無事セーフ。こんな偶然によって知り合うことができるのは映画の中だけだろうが、それにしてもよくできた出会いの設定と感心！

前半1時間は、幸せ三昧……

ラブストーリーは幸せと不幸の落差が大きいほどインパクトがあるもの……？ それを意識してか、この映画の前半1時間はこれでもかこれでもかというほど幸せな2人を見せつけてくれる。偶然のハプニングから生まれた出会い、ファニユが勤める林業研究所でのごちないデート、恋の予感と恋の始まり、そして数回のデートの後、一気呵成に結婚へ。何とも理想的な進行だ。

さらにこの映画では、幸せいっぱいの新婚生活が、自然の中に建てられた「ファニユとジョンインの家」の中で展開される。リビングルームのアクセントとなるぜんまいの柱時計からこの映画で大きな役割を果たすことになるペンキで塗られた大きな郵便受けまで、新婚生活に必要なものはすべて2人が選び、つくったもの。そんな新婚生活の中でファニユは林業研究所での仕事に励み、ジョンインは教授を目指して猛勉強。そんなベタベタというか、イチャイチャというか、誰でも多少の期間は経験したことのある（？）新婚生活の様子が約1時間にわたって延々と描かれる。それがイヤ味にならず、ホントに微笑ましく鑑賞できるのは、ラブストーリーの貴公子といわれたパク・シニャンと当時韓国一の好感度女優チェ・ジンシルだから……。

韓国の医療保険制度は……？

今アメリカでは民主党の大統領候補をめぐってヒラリー・クリントンとバラク・オバマがしのぎを削っているが、その争点の1つは医療保険制度すなわち国民皆保険制度の創設をめぐる問題点だ。日本は早くから国民皆保険制度が実現したうえ、高齢者には医療費タダという優遇制度もあるから、病院は高齢者の憩いの場となっているが、韓国では……？

幸せな新婚生活の中、チラホラと見えてくるのがファニユの健康状態の悪化。急に寒いと言い出したり、コーヒークップを落としたり、頭痛を訴えたり、挙げ句の果てはトイレに駆け込んで嘔吐したり。日本ならこんな症状が出はじめた段階で病院に行くはずだが、韓国はどうも違うよう……。すなわち、ファニユが病院で診察を受けたのは、リビングルームでバツリと倒れ救急車で運ばれた時がはじめて。そして、そこでわかったのが悪性の脳腫瘍ということだから、もはや完全な手遅れ。

ファニユの若さでなぜ？ と思うのは当然だが、医師が頭痛や手足のしびれなど自覚症状があったはずだと指摘したのはもっともな話。その意味ではファニユもジョンインも自分たちの健康管理に「手落ちあり」だが、今さらそんなことを言っても、もはや後の祭。

前半1時間延々と幸せな新婚生活を描いたのは、その後2人をどん底に突き落とすためだったことは明らかだが、それだけの工夫では立派な映画に仕上げることはムリ。そこからどんな感動的なラブストーリーが生まれるのか……。またタイトルとなっている「手紙」が何を意味するのか……。後半1時間に、監督の手腕が問われることに……。

後半には、ひと山もふた山も

ジョンインの懸命の看護にもかかわらずファニユは死亡。それは当然の流れだが、その経過の中でいかに観客を泣かせるかが監督の腕の見せどころ。したがって、1998年度の韓流ナンバーワンヒット作のその点に関する泣かせ方をまずはじっくりと。

ところで、この映画の前半には1つ気になるシーンがあった。それは2人がふざけあっていただけファニユが転び、足にケガをした時、親友のジョンイル（チェ・ヨン



© ShinCine Communications

ミン)が薬草を塗って治療してくれるシーン。そこでのジョンイルのセリフが、「これは薬草としては有効だが、飲んだら死んでしまう劇薬だ」ということ。ジョンインはその薬草の入ったビンを今後のファニユの治療のために必要だと考えて棚の中に大切にしまったのだが、よほどその取扱いに注意しなければヤバイのでは……？

そんな予感が的中したのは、ファニユの死亡後腑抜けのようになっていたジョンインが思い出のリビングルームで柱時計の動きを止め、一人になった時。翌朝ジョンイルがいくらドアをたたいてもジョンインが出てこないため、やむをえず勝手口のドアを蹴破って家の中を探すと、風呂場の中でジョンインが……。ここで私ははっきりジョンインは自殺してしまったと思ったが……。

邦画なら普通そういう展開だろうが、韓流はそれほど単純ではなく、これからさらにひと山もふた山も……。

ラスト30分で、「手紙」の意味が……

『手紙』というタイトルの意味を暗示するシーンは前半にも登場する。それは、ジョンインがファニユから誕生日に何をプレゼントしてほしいかと聞かれて、「手紙が欲しい」と答えるシーン。ところが、ここでファニユがジョンインに渡した手紙は自分が書いたものではなく、ある本の紹介だったから、私はすこしガックリ。もちろん、それはそれで悪くはないのだが、ジョンインはホントはファニユの心を込めた手書き

の手紙が欲しかったのでは……？

私はそう思い、若干不満に思っていたのだが、何とファニユが死亡し、ジョンインが半強制的に気分転換のため思い出の自宅を離れさせられていた時に届いたのが、ファニユからの手紙。一瞬そんなバカなと思ったが、そこで気持ちをとり直して考えたのは、なるほどここからが監督が描こうとしたこの映画のハイライトなのかということ。さて、その手紙には何が書かれていたのだろうか……？

手紙は一体誰が……？

この手紙が届いたことによってジョンインが引越しをやめたのは当然。だって、これからいつまたどんな手紙が届くか、それがジョンインの生き甲斐になるはずだから。そんなジョンインの予測どおり、死んだはずのファニユからの手紙が一定の期間をあけてあの郵便受けに届いたから、これ以降ジョンインの唯一の楽しみはそれを読むことに。そして、ある日ファニユからの心の込もった手紙を読んでいる時、急に吐き気が。これはひょっとして……？

さすが、1997年当時の韓国最高の女優だけに、チェ・ジンシルのそんな演技はお見事。しかし、こんな何通もの手紙を一体誰が……？ いくらキリスト教徒が多い韓国でも、まさかホントに天国から手紙が届くわけではないから、これが誰かの仕業であることは明らかだが……。

クライマックスはビデオテープ

この映画が最高にオシャレなのは、冒頭とラストがうまく結びついていること。すなわち、京江駅には「自由に好きな鉢を持って行って下さい」と書かれて、美しい花の鉢植えが置かれており、これが冒頭の出会いのストーリーを生み出したのだが、実はこの鉢植えはファニユが置いていたものだった。すると、ファニユが死亡した後それがなくなっていたのは当然だが、なぜか映画のラスト近くになると京江駅には再びその鉢植えが……。

そこでジョンインがハタと気づいたのは、ひょっとしてあの手紙は〇〇が……？ ということ。それが誰かはここでは伏せておくが、「これが最後の手紙です」と言われながらジョンインが受けとった封筒の中には1本のビデオテープが入っていた。このビデオテープに映っていたのは当然ファニユ。つまり、ジョンインが学校に行って

いる留守の時を見はからってファニユが自らビデオカメラの前で撮影したテープだ。

脳腫瘍の手術を受けたため頭に帽子をかぶり、顔の表情も冴えないファニユだが、そこで語るのはジョンインに対する熱い思いばかり。しかも、その録画撮りの最中にジョンインが自宅にかけた留守電へ残した言葉は「愛してます」というものだったから、それを聞いたファニユが感動に泣き崩れたのは当然。しかして、それを観ているジョンインは、思わずテレビに映る彼の前ににじり寄り涙を流すことに……。

さすが1998年度のナンバーワンヒット作品は、泣かせるツボを心得たものと大いに感心。

ラストシーンは五葉松の側

ファニユは林業研究所の研究員だから植物に詳しいのは当然で、ジョンインとのデートの時も花や植物に関する話題がいっぱい。その1つが普通の黒松と五葉松の違いだったが、ファニユの遺言によってファニユの遺灰はその五葉松の側にまかれていた。したがって、ジョンインにとってはこの五葉松がファニユのお墓と同じ。ちなみに、韓国では今なお土葬の習慣もあるらしいが、土葬にするとお墓のお守りが大変なので、ファニユはそこまで気をつかって火葬のうえ灰を五葉松の側にまいてくれと言ったのかも……？

この映画は前半1時間はまずまずの流れだが、後半に入って次第に情感が盛り上がり、ファニユからの手紙が登場するや俄然身を乗り出していくことになる映画。そして、ラストシーンはこの五葉松の側だが、そこに登場するのはジョンインともう1人、かわいい男の子ヨンフン（イ・ジュンソプ）。

なるほど、なるほど……。今やジョンインはしっかり再生し、強く生きていく決意を固めているわけだ。やっぱりこういうハッピーエンドの方が観客は幸せに……。

2008(平成20)年3月5日記



DVD 発売中、価格：¥5,040(税込)、
発売元：ワコー／ユニシア／エスピー
オー 販売元：エスピーオー